

## 原 著

地域高齢者の認知症カフェへの参加に至る動機と  
継続参加要因の検討藤村一美, 長谷亮佑<sup>1)</sup>, 木嶋彩乃<sup>2)</sup>, 大河内彩子<sup>3)</sup>, 熊谷たまき<sup>4)</sup>

愛媛大学大学院医学系研究科看護学専攻 地域システム看護学講座 東温市志津川 (〒791-0295)  
山口大学大学院医学系研究科 公衆衛生学・予防医学<sup>1)</sup> 宇部市南小串1丁目1-1 (〒755-8505)  
大分県立看護科学大学<sup>2)</sup> 大分市大字廻栖野2944-9 (〒870-1201)  
熊本大学大学院 生命科学研究部環境社会医学部門 看護学分野 健康科学講座<sup>3)</sup> 熊本市中央区九品寺4丁目24番1号 (〒862-0976)  
大阪市立大学大学院<sup>4)</sup> 大阪市阿倍野区旭町1丁目5番17号 (〒545-0051)

Key words : コミュニティ・カフェ, 地域高齢者, 介護予防, 認知症カフェ, 継続参加要因

## 和文抄録

本研究は, 認知症カフェに参加している地域高齢者の認知症カフェ参加への動機, ならびに継続参加要因を検討することを目的とした。A市B地区にあるNPO法人が開催する認知症カフェに継続参加している地域高齢者10名を対象に, インタビューガイドを用いた半構造化面接を2017年8月～9月に実施した。インタビューの内容は, カフェ参加に至る動機, カフェを継続して利用している理由であった。分析は, 逐語録を作成し, 質的帰納的分析方法を採用した。認知症カフェ参加に関する語りを抽出し, コーディングを行い, サブカテゴリー, カテゴリーを作成した。本研究は, 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。研究対象者は, 前期高齢者が6名, 後期高齢者が4名, 性別は男性, 女性とも5名であった。認知症カフェへの参加動機として, 【周囲からの働きかけ】【自分自身の健康面への関心】【地域活性化への期待】の3カテゴリーが抽出された。継続参加要因として, 【参加しやすい開催設定】【健康意識・介護予防意識の向上】【地域貢献意識の醸成】の3カテゴリーが抽出された。認知症カフェに参加

する高齢者, 特に前期高齢者は, 利己的動機のみならず, 地域への貢献を意識して継続参加していることが明らかとなり, さらに認知症カフェに参加する高齢者自らが地域を支えるキーパーソンと成り得ること, 認知症カフェを通して地域のソーシャル・キャピタルを醸成していける可能性が示唆された。

## I. 緒言

我が国における認知症の人の数は2012 (平成24)年に約462万人, 65歳以上高齢者の約7人に1人と推計されている<sup>1)</sup>。健常者と認知症との中間にあたる軽度認知障害 (MCI : Mild Cognitive Impairment) の段階と推計される約400万人と合わせると, 65歳以上の高齢者の約4人に1人が認知症, 又はその予備群とも言われている。また, 認知症の人は2025 (平成37)年には約700万人, 65歳以上の高齢者の約5人に1人に達することが見込まれている。

このような背景のもと, 厚生労働省において, 団塊の世代が75歳以上となる2025 (平成37)年を見据え, 認知症の人の意思が尊重され, できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指し, 2015 (平成27)年1月27日「認知症施策推進5か年計画」(オレンジプラン) (2012 (平成24)年9月厚生労働省公表)

を改め、新たに「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」(新オレンジプラン)<sup>2)</sup>が策定された。新オレンジプランでは、「認知症高齢者等にやさしい地域づくり」を推進していくことを目指し、7つの柱を挙げている。そのうちの一つとして、新オレンジプランでは、認知症の人の介護者の負担を軽減するため、認知症の人やその家族、また地域住民や専門家が相互に情報を共有し、お互いを理解し合うオレンジカフェ(認知症カフェ)等の設置を推進するとし、認知症地域支援推進員等の企画により地域の実情に応じて認知症カフェを実施するという目標が新設されている<sup>2)</sup>。

認知症カフェは、すでに英国、オランダで効果をあげており<sup>3)</sup>、近年我が国でも実践例が全国各地に多数見られる。我が国における認知症カフェは、「認知症の人と家族、地域住民、専門職等の誰もが参加でき、集う場」として、認知症の人に対する地域での日常生活・家族の支援の強化の一つとして位置づけられている<sup>2)</sup>。我が国で展開されている認知症カフェの特徴として、認知症患者だけではなく住民同士の横のつながりを形成することを旨とした地域住民の誰もが利用できる形で展開されていることが多い<sup>4)</sup>。平成28年11月～12月に行われた全国の認知症カフェ実施者に対する実態調査<sup>5)</sup>においても、1回の認知症カフェ参加者数の平均17.6人のうち、参加者内訳のそれぞれの平均は、認知症の人4.41人、認知症の家族3.56人、地域住民8.80人、専門職3.98人と、地域住民の占める割合が約半数を占めていたことが報告されている。

また、認知症カフェに参加した人々(認知症の人や家族、地域住民)の認知症カフェ参加による効果についても報告がされている。認知症カフェの参加者それぞれへの効果として、認知症の人の場合、地域とのかかわりの機会が増加し、情動に働きかけられ心理的な安定につながっていることや、地域住民の場合には認知症の理解と偏見の解消、独居高齢者への支援の場などが挙げられている<sup>5)</sup>。しかし一方で、運営にあたり、将来的な継続への不安や運営方法への不安の声もあり、継続が難しく、すでに閉鎖してしまっているカフェも散見されている<sup>5)</sup>ことも指摘されている。認知症カフェへの運営や参加を促進するためには、認知症カフェの参加者である認知症の人やその家族、地域住民が参加に至る動機や、

どのような経験や経緯を経て継続参加に至っているのかについての検討が必要であるが、それらについて十分に検討がされているとは言い難い現状にある。これらが明らかにされないことで、認知症カフェの関係者以外の地域住民への認知症カフェの存在への理解や目的の浸透、継続のための方策のあり方などの検討が十分に出来ない可能性があると考えられる。

さらに、高齢者の主観的健康感の維持・向上には社会活動への参加が重要であることが示唆されており<sup>6)</sup>、認知機能の維持においても社会活動への参加が大いに関連する<sup>7)</sup>ことから、社会参加は高齢者が老年期を充実して健康に過ごすために必要であると考えられる。しかし、平成25年度内閣府による「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査<sup>8)</sup>」によると、地域の自主的活動への参加希望は約7割であるが、実際に参加している人は約3割にとどまっている実態が報告されている。認知症カフェは、認知症の人だけではなく地域住民誰もが参加し、地域住民同士でつながりを形成するコミュニティ・カフェとしても機能しており、社会参加する場として期待されている<sup>2, 3)</sup>ことから、地域高齢者が継続参加を促進するための有効な働きかけについての検討が不可欠であると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では現在認知症カフェに参加している地域高齢者へのインタビュー調査を行い、認知症カフェに継続参加に至る要因を明らかにすることを目的とした。本研究の意義として、地域住民、特に高齢者が認知症カフェのみならず、地域の自主活動に参加するための方略についての示唆を検討する際の一助になると考える。

## II. 研究方法

### 1. 研究デザイン：質的帰納的デザイン

2. 研究対象者：A市(2017年度の高齢化率33.4%)B地区にある、NPO法人が主催する月1回2時間の認知症カフェに継続して参加している65歳以上の地域住民を対象として主催者を介して直接依頼し、10名から研究協力が得られた。研究対象者からの情報ではあるが、10名のうち、認知症あるいは、認知症疑いのある高齢者はいなかった。なお、本研究の対象である認知症カフェは、平成28年10月より開始され、認知症患者(疑いを含む)、家族介護者、地域

住民、認知症について学びたい人など地域住民同士でつながりを形成するコミュニティ・カフェとして機能している。医療関係者である主催者のほか、大学生、専門学生、市民ボランティア等が運営スタッフとして参加している。認知症カフェは調査時点で、火曜日に月1回、土曜日に月2回開催されており、いずれの3回とも同じ内容で開催されるため、参加者はその月の予定に合わせて参加日を月1回選ぶことができる。1回の開催時間は2時間で、認知症カフェのプログラムの内容は、15分程度の医師による健康に関する講話、運動や脳トレーニングを取り入れたアクティビティ、レクリエーション、茶話会（飲み物を飲みながらの参加者同士のフリートーク）、個別相談が基本的な内容である。1回の参加者は10～20名程度である。参加者は、お茶代として一人100円を支払って参加している。

3. データ収集：インタビューガイドを用いた個別の半構造化面接を2017年8月～9月に行った。インタビュー内容は、「認知症カフェへの参加動機」、「カフェを継続して利用している理由」のほか、「属性（年齢、性別）」についてであった。面接場所はNPO法人が所有する施設内の居室であり、静かな環境で落ち着いて話ができるように配慮した。インタビューの内容は研究対象者の同意を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。

4. 分析方法：逐語録を繰り返し読み、逐語録から認知症カフェへの参加動機や継続参加に関して述べている部分を抽出した。それらの意味を的確に表わ

すコード名を付け、類似性・相違性を検討しサブカテゴリーとし、同様の過程を経てカテゴリー化を行った。すべての過程において、質的研究の経験のある研究者と検討を重ね抽出するカテゴリーの妥当性を高めた。

5. 倫理的配慮：本研究は、山口大学大学院医学系研究科保健学専攻医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（管理番号466）。調査協力者への依頼にあたっては、全員に対し、研究の目的、研究方法、データの取り扱い、研究への参加、および中止は任意であり、インタビューを拒否しても認知症カフェへの参加に関して一切不利益を被らないことを文書および口頭で説明し、文書にて同意を得た。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 研究対象者の概要

研究対象者10名の年齢は、前期高齢者が6名、後期高齢者が4名、性別は男性、女性とも5名であった。研究対象者の多くは無職であったが、民生委員や福祉委員といった地域での役割を担っている人が2名いた。認知症カフェに初開催時から参加していた6名中4名は、主催者と同地域の住民であり、主催者から直接紹介を受けていた。その他は、ちらしや友人の紹介、別場所で開催された主催者の講演での紹介を通して、認知症カフェを知り参加していた。インタビュー時間は、平均50分（30分から1時間20分）であった。

表1 研究対象者の概要

対象者	年齢(歳)	性別	現在の職業の有無	参加開始時期	参加頻度	カフェ参加のきっかけ
101	70歳代前半	男性	無	2017年1月	月1回	友人の紹介
102	70歳代前半	女性	無	2017年1月	月1回	友人の紹介
103	60歳代前半	男性	有	2016年10月	月1回	配布ちらし
104	70歳代後半	女性	無	2016年10月	月1回	配布ちらし
105	70歳代後半	男性	無	2016年10月	月1回	主催者からの案内 (主催者と同自治区の住民)
106	70歳代前半	男性	無	2016年10月	月1回	主催者からの案内 (主催者と同自治区の住民)
107	80歳代前半	女性	無	2016年12月	月1回	友人の紹介
108	70歳代前半	女性	無	2017年8月	月1回	自治会での主催者の健康講話
109	60歳代後半	男性	有	2016年10月	月1回	主催者からの案内 (主催者と同自治区の住民)
110	80歳代前半	女性	無	2016年10月	月1回	主催者からの案内 (主催者と同自治区の住民)



2. 認知症カフェへの参加動機, ならびに継続参加要因の検討

分析の結果, 認知症カフェへの参加動機として, 【周囲からの働きかけ】【自分自身の健康面への関心】【地域活性化への期待】の3カテゴリーが抽出され, 継続参加要因として, 【参加しやすい開催設定】【健康意識・介護予防意識の向上】【地域貢献意識の醸

成】の3カテゴリーが抽出された.

以下に, 認知症カフェへの参加動機, 継続参加要因の詳細について述べる. なお, 本文ならびに図表においては, それぞれのカテゴリー, サブカテゴリーに対して, a, b, cを付して記載した. また, 本文においては, カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを[ ], コードを〈 〉で示した.

表2 認知症カフェへの参加動機, ならびに継続参加要因

分類	カテゴリー	サブカテゴリー	コード	
参加動機	a. 周囲からの働きかけ	a-1. 友人・主催者からの声かけ	友人からの声かけに興味を持った 主催者に声を掛けてもらえた	
		a-2. チラシなどの広報	チラシの情報から面白そうだった	
	b. 自分自身の健康面への関心	b-1. 認知症とその予防方法に対する学習機会の希求	自身の物忘れから, 認知症への不安があった 身近な人が認知症になったので, 詳しく知りたいと思っていた 認知症対策の必要性を感じていた	
		b-2. 外出の機会の必要性への認識	できるだけ外出できる機会を求めている できるだけ外出できる場を求めている 体力が落ちないように定期的に出かけるところが欲しかった	
		b-3. 主催者側に医療専門職がいることへの安心感	医療職から直接信頼できる情報が入手できると思った 医療職者がいるので安心して参加できると思った 主催者に気軽に健康の話や相談ができる	
	c. 地域活性化への期待	c-1. 地域貢献につながる可能性への期待	地域に何らかの形で貢献したいと思っていた 学んだことを地域の人のために役立てたかった 地域を盛り上げるきっかけになりそうだった 同じ地域の住民として認知症カフェを応援したいと思った 住民の一人として協力したいと思った	
		c-2. 地域住民同士の交流への期待	地域の人と話せる場になると思った 地域住民同士のつながりの機会となれたらと思った	
	継続参加要因	a. 参加しやすい開催設定	a-1. 自由で無理なく参加可能	同じ内容での開催が月複数回ある 自由に無理なく参加できる 参加を強制されない
		b. 健康意識・介護予防意識の向上	b-1. 健康(認知症も含む)に関する学びへの意欲	認知症だけでなく, 健康についてももっと勉強したい 認知症カフェでのアクティビティが日常生活で役に立つ 認知症以外にも様々な健康の知識が得られる
			b-2. 日常の悩みや健康に関して相談できる場	自身の健康について相談できる 生活上の悩みを気軽に相談できる
			b-3. 継続による自身の健康を維持	続けることで自分の健康を維持していきたい 参加することで自分自身の健康状態の確認になっている 継続できることが健康の証拠だと思っている
		c. 地域貢献意識の醸成	c-1. 地域への貢献意識の高まり	認知症について理解を深め, 認知症の人を支援したい 認知症カフェで得た知識を地域に役立てたい 認知症カフェで学んだことを自治会活動につなげていきたい 認知症カフェで得た知識を地域住民に伝えたい 地域に育てられたと思っているので, 地域に恩返しをしたい
認知症カフェでのアクティビティが楽しい 季節に応じたイベントが楽しい 昔馴染みの参加者同士で定期的に会える機会である 住民同士で交流できることがうれしい				
地域の若い人や学生ボランティア, 子どもとも話せる機会である 参加しなかったときは他の住民から声をかけてもらえる				
c-3. 住民が定期的に集まれる機会・場の享受				同年代で集まれる場所・機会となっている 定期的に住民同士で交流することの必要性を認識

### 1) 認知症カフェへの参加動機

認知症カフェへの参加動機として生成されたカテゴリーは【周囲からの働きかけ】、【自分自身の健康面への関心】、【地域活性化への期待】の3カテゴリーであり、サブカテゴリーは10であった。

#### (1) 【a. 周囲からの働きかけ】

【a. 周囲からの働きかけ】のカテゴリーは、[a-1. 友人・主催者からの声かけ]、[a-2. チラシなどの広報]の2つのサブカテゴリーからなっていた。参加者らは、[a-1. 友人・主催者からの声かけ]で認知症カフェに興味を持ったり、[a-2. チラシなどの広報]で面白そうだと思ひ、自主的に参加を決めていた。

#### (2) 【b. 自分自身の健康面への関心】

このカテゴリーは、[b-1. 認知症とその予防方法に対する学習機会の希求]、[b-2. 外出の機会の必要性の認識]、[b-3. 主催者側に医療専門職がいることへの安心感]の3つのサブカテゴリーからなっていた。参加者らは、〈自身の物忘れから、認知症への不安があった〉り、〈身近な人が認知症になったので、詳しく知りたいと思った〉り、〈認知症対策の必要性を感じていた〉。一方で、[b-2. 外出の機会の必要性の認識]として、外出できる機会や場所を求めている。その際に[b-3. 主催者側に医療専門職がいることへの安心感]があり、〈医療職から直接信頼できる情報が入手できると思った〉り、〈主催者に気軽に健康の話や相談ができる〉ことから、参加を決めた人もいた。

#### (3) 【c. 地域活性化への期待】

【c. 地域活性化への期待】のカテゴリーは、[c-1. 地域貢献につながる可能性への期待]、[c-2. 地域住民同士の交流への期待]の2つのサブカテゴリーが抽出された。[c-1. 地域貢献につながる可能性への期待]では、〈同じ地域の住民として認知症カフェを応援したいと思った〉り、地域で開催される認知症カフェが〈地域を盛り上げるきっかけになりそうだった〉ことで〈住民の一人として協力したいと思った〉ことから参加に至った人もいた。また、〈地域に何らかの形で貢献したいと思っていた〉人や〈学んだことを地域の人のために役立てたかった〉人たちが認知症カフェでの学びをもとに地域貢献に至れる可能性を期待して、参加に至ったことが明らかとなった。[c-2. 地域住民同士の交流への期待]

では、〈地域の人と話せる場になると思った〉り、自分が参加し協力することで〈地域住民同士のつながりの機会となれたらと思った〉参加者もいた。

### 2) 継続参加要因

継続参加要因として生成されたカテゴリーは、【a. 参加しやすい開催設定】、【b. 健康意識・介護予防意識の向上】、【c. 地域貢献意識の醸成】の3つであり、サブカテゴリーは7つであった。

#### (1) 【a. 参加しやすい開催設定】

このカテゴリーは、[a-1. 自由で無理なく参加可能]というサブカテゴリーからなっていた。当該の認知症カフェでは、参加者が無理なく参加できるように月2-3回同じプログラム内容での開催を行っている。そのため、〈同じ内容での開催が月複数回ある〉ことから、〈自由に無理なく参加できる〉こと、〈参加を強制されない〉といった要因が主体的な継続参加に結び付いていると考えられた。

#### (2) 【b. 健康意識・介護予防意識の向上】

【b. 健康意識・介護予防意識の向上】のカテゴリーには、[b-1. 健康（認知症も含む）に関する学びへの意欲]、[b-2. 日常の悩みや健康に関して相談できる場]、[b-3. 継続による自身の健康を維持]の3つのサブカテゴリーからなっていた。

認知症カフェでは、毎回15分程度の医師による健康に関する講話、運動や脳トレーニングを取り入れたアクティビティ、参加者同士のフリートークが行われている。そのため、[b-1. 健康（認知症も含む）に関する学びへの意欲]では、〈認知症だけでなく、健康についてもっと勉強したい〉、〈認知症カフェでのアクティビティが日常生活で役に立つ〉、〈認知症以外にも様々な健康の知識が得られる〉こと、つまり参加者自身の健康に役立つ学びや情報が得たいという意欲が述べられていた。また、認知症カフェでは、参加者同士のフリートークの時間や終了後に、参加者が主催者である医師や保健医療介護職に〈自身の健康について相談できる〉、他の参加者にも〈生活上の悩みを気軽に相談できる〉ことが述べられており、あらゆる[b-2. 日常の悩みや健康に関して相談できる場]として活用されていることが語られた。さらに、[b-3. 継続による自身の健康を維持]では、参加者は認知症カフェに月1回〈参加することで自分自身の健康状態の確認になっている〉こと、〈続けることで自分の健康を維持していき

い), さらに〈継続できることが健康の証拠だと思っている〉ことが明らかとなった。

### (3) 【c. 地域貢献意識の醸成】

【c. 地域貢献意識の醸成】のサブカテゴリーは、[c-1. 地域への貢献意識の高まり] [c-2. 地域の人との交流・活動への喜び] [c-3. 住民が定期的に集まれる機会・場の享受] の3つであった。[c-1. 地域への貢献意識の高まり] では、〈認知症カフェで学んだことを自治会活動につなげていきたい〉、〈認知症カフェで得た知識を地域住民に伝えたい〉、〈地域に育てられたと思っているので、地域に恩返しをしたい〉といった貢献意識が述べられた。特に、このような認識は、前期高齢者6名中5名から語られた。[c-2. 地域の人との交流・活動への喜び] では、参加者の多くが〈認知症カフェでのアクティビティが楽しい〉、〈季節に応じたイベントが楽しい〉ことを述べていた。また、〈昔馴染みの参加者同士で定期的に会える機会である〉ことや〈住民同士で交流できることがうれしい〉ことが語られた。対象である認知症カフェでは、高齢者だけでなく、学生ボランティアも参加していることから、〈地域の若い人や学生ボランティア、子どもとも話せる機会である〉ことが高齢者にとっての人との交流の機会となり、楽しみにつながっていた。一方で、認知症カフェ参加時だけでなく、認知症カフェを休んだ際には、他の参加者から〈参加しなかったときは他の住民から声をかけてもらえる〉といった認知症カフェ開催日

だけでないネットワークが形成されており、そのことが継続参加の要因となっていることが述べられた。[c-3. 住民が定期的に集まれる機会・場の享受] では、認知症カフェが〈同年代で集まれる場所・機会となっている〉ことのほか、[定期的に住民同士で交流することの必要性を認識] していることが参加者から語られた。

### 3) 認知症カフェへの参加動機と継続参加要因の関係の検討

認知症カフェへの参加動機、ならびに継続参加要因のカテゴリー間について検討した結果を図1に図示した。参加動機としての【周囲からの働きかけ】と継続参加要因としての【参加しやすい開催設定】は【a. 環境要因】、参加動機としての【自分自身の健康面への関心】と継続参加要因としての【健康意識・介護予防意識の向上】は【b. 個人の健康への意識】、参加動機としての【地域活性化への期待】と継続参加要因としての【地域貢献意識の醸成】は【c. 地域への意識】として分類された。

## IV. 考 察

本研究では、認知症カフェに継続参加している地域高齢者へのインタビューから、認知症カフェへの参加動機、ならびに継続参加要因を明らかにした。

まず、認知症カフェへの参加動機として、【a. 周囲からの働きかけ】、【b. 自分自身の健康面への関心】、【c. 地域活性化への期待】、

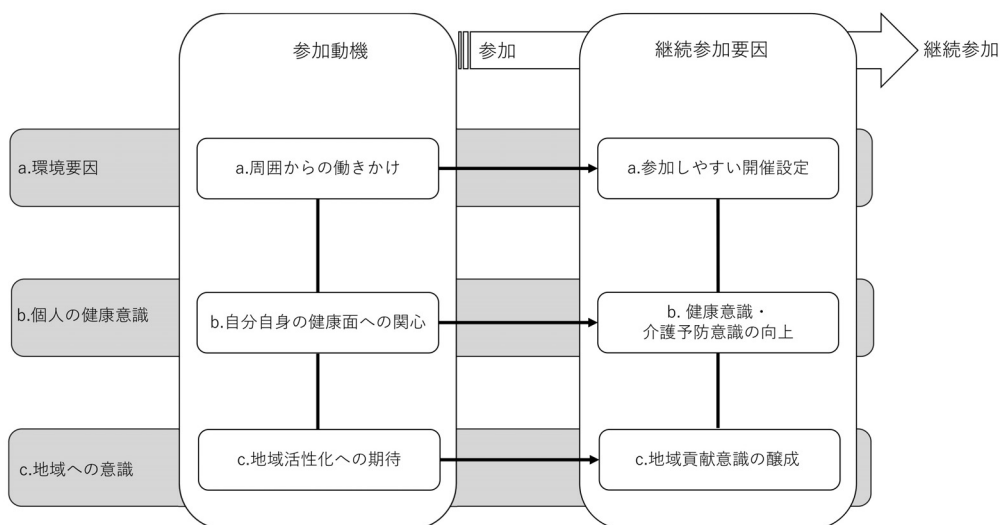


図1 認知症カフェ参加の動機と継続参加要因のカテゴリー間関係



心】、【c. 地域活性化への期待】が抽出された。本研究における認知症カフェ参加の地域高齢者では、他者からの働きかけで受動的に参加を決定する傾向にある高齢者が多いことが明らかとなった。地域活動に参加するきっかけになることとして、「友人、仲間のすすめ」が26.4%で最も高く<sup>8)</sup>、直接誘われることが行動を起こす契機となっていることが先行調査により報告されている。岡本<sup>9)</sup>は、地域の高齢者が社会活動に参加するためには、親しい友人や仲間の数が多いこと、外出や活動参加への誘いが必要であることを報告している。福島<sup>10)</sup>は、高齢者の中には地域活動・ボランティア活動に参加するきっかけがないために活動に至っていない人がいることが予想されることから、きっかけをもたらし場を増やすことで地域活動をする人が増える可能性を指摘している。本研究においても地域住民からの紹介や声かけにより認知症カフェの参加に至ることが多かったことから、現在の参加者からの認知症カフェ参加への声かけや紹介により、不安なく安心して参加を決定することができるのではないかと考えられた。また、主催者（医師や医療者）からの声かけ以上に近隣や友人・知人といった地域住民からの紹介や声かけが極めて有効である可能性が示唆された。今後、認知症カフェの参加者自らが未参加の住民に認知症カフェの紹介や参加への声掛けを促すことで、地域住民が認知症カフェに参加しやすくなるのではないかと考えられた。

本研究における認知症カフェ参加の地域高齢者では、認知症について学びたいといった利己的動機で参加している高齢者が多いことが明らかとなった。柳沢ら<sup>11)</sup>の企業退職男性高齢者を対象とした地域社会活動への参加継続プロセスを明らかにした先行研究によると、参加者らの参加動機として終始利己的動機が語られていたとされているが、本研究対象となった認知症カフェに参加している高齢者においても利己的動機からの参加が多い点において同様の結果であったと言える。さらに、大澤ら<sup>12)</sup>によると、高齢者の多くが認知症を発症することに対する不安を抱え、認知症の予防に努めたいという思いを持っていることが明らかにされているが、本研究においても先行研究結果と一致しており、支持するものであった。認知症に対して自分や周囲の人にも発症しうる疾患として受け止めており、そのため認知症

カフェで認知症について学びたいと学習の機会を求め、さらにその予防や対応についても情報を得たいという思いから認知症カフェに参加していたと考えられる。

一方、本研究結果より、利他的動機として認知症カフェを通じて地域活性化が促進されることを期待して、さらにはその一翼を担いたいという動機からの認知症カフェに参加している高齢者、特に前期高齢者において認知症への関心や自分自身の認知症予防への関心よりも地域への貢献意識から、認知症カフェへの参加を決めた人がいたことは、注視すべき結果であると考えられる。内閣府の調査<sup>1)</sup>によると、前期高齢者では、健康に問題を抱えることが少なく、要支援・要介護認定を受けた人はそれぞれ1.4%、2.9%と後期高齢者の要支援の認定を受けた人9.0%、要介護の認定を受けた人23.5%と比較しても低いことから、十分に地域活動が行えることが推察される。平成25年度 高齢者の地域社会への参加に関する意識調査<sup>7)</sup>の結果では、地域の福祉や環境を改善することを目的としたNPO（民間非営利活動団体）の活動に対して「関心があるがよくわからない」33.1%、「関心がある」23.0%と全体の半数以上が関心を示していたことから、地域活動に関心をもつ高齢者に対して、地域の行事や自治会等で具体的に活動できる場の情報提供を行い、気軽に参加できる働きかけが重要になると思われる。

次に、認知症カフェ継続参加要因として、【a. 参加しやすい開催設定】、【b. 健康意識・介護予防意識の向上】、【c. 地域貢献意識の醸成】の3つが抽出された。参加者らは認知症について学ぶだけでなく、健康に関することも学べる機会であること、医療専門職に健康について気軽に相談できる機会があること、世代の異なる学生と接することができることなど、普段の日常生活では体験できないことが参加者にとって参加継続動機となっていると考えられた。矢野ら<sup>13)</sup>は、社会参加によって精神面での健康が得られていることが継続する要因になっていることを指摘しているが、認知症カフェの利用により人との交流・活動への喜びといったプラスの影響が得られていることが、継続参加の一因となっていることが推察された。欧米の先行研究によると、社会参加が多い高齢者は、少ない高齢者よりも認知機能が高い<sup>14, 15)</sup>ことが報告されている。さらに、社会参加

や社会的ネットワークの程度は、高齢者の認知機能にプラスの影響を与えること、認知症予防の可能性が高い<sup>16)</sup>ことが報告されている。認知症カフェに継続参加することの効果については不明な部分も多いが、継続参加により社会的ネットワークの形成が促進されることにより、日常生活における刺激となることで認知機能にプラスの効果が生じる可能性も期待できると考えられる。本研究における参加者は、認知症カフェで行ったアクティビティを日常生活で実施したり、様々な健康の知識を得ることで自分自身の健康保持・増進に努めるようになっていた。このことから、認知症カフェは、参加者自身の健康に関する知識や健康意識を高め、健康行動を促す場としての役割も期待ができる。特に、当該の認知症カフェでは、参加者同士が従来からの顔見知りであり、定期的に会うことのできる場ともなり、居心地のよい居場所、人間関係が形成されていた。参加者同士の交流だけでなく、学生ボランティアも参加していることから、多世代交流の機会となっていたと考えられた。さらに、開催日に欠席していた人や周囲の人を気に掛け合うなど、自然と参加者同士のネットワークが形成されていた。これは、当事者同士の連携・つながりであり、互惠互助に根差した関係作りが行われていたと考えられる。

さらに、当初は地域貢献を考えていなかった参加者においても、地域の人に自分の学んだことを伝えていきたいといった地域貢献を意識した発言が聞かれたことから、認知症カフェは地域住民の健康意識や地域貢献への意識を向上させる場として有効である可能性が示唆された。つまり、動機が利己であることは決してマイナスなことではなく、自分自身への健康への関心があることで、認知症カフェに積極的に参加することができ、参加継続をすることで利他的意識に向かうことが可能となるのではないかと考えられた。田代ら<sup>17)</sup>によると、大学と地域住民が連携協働する「認知症カフェ」の開催が利用者にもたらす成果として、学生との交流による自尊感情の高まりが報告されている。しかし、田代ら<sup>17)</sup>の研究では、地域住民はあくまでも大学が準備した内容を受け身的に楽しむだけであり、本研究が明らかにした、地域貢献意識の醸成という利他的意識は確認できなかった。本研究は、認知症カフェに参加する地域住民における、認知症カフェや地域活動全般に対

する貢献意識を明らかにすることができた。

また、本研究では、認知症カフェに継続参加している地域高齢者へのインタビューから、認知症カフェへの参加動機、ならびに継続参加要因を明らかにする分析の過程において、参加動機と継続参加要因は、【a. 環境要因】、【b. 個人の健康への意識】、【c. 地域への意識】の3つに分類された。特に、認知症カフェへの参加動機の【b. 自分自身の健康面への関心】は継続参加要因の【b. 健康意識・介護予防意識の向上】へ、認知症カフェへの参加動機の【c. 地域活性化への期待】は【c. 地域貢献意識の醸成】へとそれぞれ有機的な広がりを持って、特に継続参加要因の【b. 健康意識・介護予防意識の向上】【c. 地域貢献意識の醸成】は、より具体的かつ主体的なこととして参加者から語られていた。これらのことから、認知症カフェのみならず、コミュニティ・カフェに参加する人々の動機を的確に把握することで、参加継続への動機を強化していくことが可能となるのではないかと考えられた。一方で、継続参加要因の【a. 参加しやすい開催設定】も重要な要因であろう。上條<sup>18)</sup>は、コミュニティ・カフェは「地域の身近な場所であって、人々が気軽に参加でき、そこに参加することが本人に安心感や幸福感をもたらし、こころの拠り所となるような場や機会を提供する場所」と定義している。当該の認知症カフェでは月3回開催されており、いずれの3回とも同じ内容で開催されるため、参加者はその月の予定に合わせて参加日を月1回選ぶことができ、認知症カフェのプログラム内容は、医師による健康に関する講話や学生による運動や脳トレーニングを取り入れたアクティビティ、レクリエーションなどと毎回変化のあるものである。さらに、飲み物を飲みながらの参加者同士のフリートークと医師・保健師との個別相談もできる。このように自由度が高く、認知症カフェに参加する人々のニーズに沿った内容であることで有意義な場の提供となっていること、また認知症カフェを利用する高齢者にとっての居場所であり、地域や社会とつながりの場となっていると推測された。それと同時に、参加者には地域貢献への意識がある人も存在することから、認知症カフェも参加している人々が地域を支える存在、キーパーソンと成り得ること、認知症カフェを通して地域のソーシャル・キャピタルを醸成しうる可能性が考えられた。



最後に本研究の限界と今後の展望を述べる。本研究では、地域高齢者が認知症カフェへの参加動機と継続参加要因について明らかにしたが、本研究の限界として、研究対象者に認知症あるいは、認知症疑いのある高齢者が含まれておらず、認知症、あるいは認知症疑いのある高齢者の参加動機については明らかにできなかった点が挙げられる。今後の展望として、認知症、あるいは認知症疑いのある高齢者へのインタビューを行うに当たっては、十分に倫理的配慮を行う必要があり調査が困難な可能性も十分に考えられるが、身近な家族・親族等へのインタビューを行うことで参加動機や継続要因を明らかにしていくことも重要になってくると考えられる。また、本研究では1カ所のNPO法人で運営されている認知症カフェに参加している同一地域居住の高齢者を対象としたが、今後は他施設や他地域で運営されている認知症カフェに参加する認知症、あるいは認知症疑いのある高齢者を含めた参加者を対象とした調査を行うこと、研究対象者をさらに増やすことで、より多様な参加継続要因を明らかにしていくことが必要になってくるであろう。

## V. 結 論

認知症カフェに参加している地域高齢者が認知症カフェ参加の動機、ならびに継続参加要因を明らかにした。認知症カフェ参加の動機として、【周囲からの働きかけ】【自分自身の健康面への関心】【地域活性化への期待】の3カテゴリーが抽出され、認知症カフェ参加の高齢者は、利己的動機のみならず、地域への貢献を意識して参加を始めていたことが明らかとなった。継続参加要因として、【参加しやすい開催設定】【健康意識・介護予防意識の向上】【地域貢献意識の醸成】の3カテゴリーが抽出された。認知症カフェ継続参加により認知症カフェに参加する高齢者自らが地域を支えるキーパーソンと成り得ること、認知症カフェは利用者である高齢者にとっての居場所であり、地域や社会とつながりの場となっていること、さらには認知症カフェを通して地域のソーシャル・キャピタルを醸成し、高めていける可能性が示唆された。

## 謝 辞

本研究にご参加いただきましたA市B地区住民の皆様、調査の実施にあたりご協力いただきましたNPO法人山口ヘルスプロモーションネットワーク長谷歌子様に深く御礼申し上げます。

## 引用文献

- 1) 内閣府. 平成30年版高齢社会白書(全体版). 内閣府ホームページ. [http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/29pdf\\_index.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/29pdf_index.html). (参照2019-2-1)
- 2) 厚生労働省. 認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～. 厚生労働省ホームページ. <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000064084.html>. (参照2019-2-1)
- 3) 公益社団法人認知症の人と家族の会. 認知症カフェのあり方と運営に関する調査研究事業 報告書. 公益社団法人認知症の人と家族の会. [http://www.alzheimer.or.jp/webfile/cafe-web\\_0001.pdf](http://www.alzheimer.or.jp/webfile/cafe-web_0001.pdf). (参照2019-2-1)
- 4) 河野保子, 土肥敏博, 加藤重子, 讚井真理, 森田克也, 大塚 文, 前信由美, 岩本由美, 田村和恵, 佐藤敦子, 今坂鈴江, 風間栄子, 岡田京子. 平成28年度対人援助研究ブランディング看護・医療福祉部門 超高齢社会における高齢者・認知症者の健康及び世代継承性・社会貢献活動に関する看護カフェモデルの構築 第I編 - 高齢者カフェの実態調査報告 -. 看護学統合研 2018; 19 (2) : 1-13.
- 5) 社会福祉法人東北福祉会 認知症介護研究・研修仙台センター. 認知症カフェの実態に関する調査研究事業報告書 平成29年3月. 厚生労働省ホームページ. [https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/97\\_touhokuhukushi.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/97_touhokuhukushi.pdf). (参照2021-2-14)
- 6) 中村好一, 金子 勇, 河村優子, 坂野達郎, 内藤佳津雄, 前田一男, 黒部睦夫, 平田 滋, 矢崎俊樹, 後藤康彰, 橋本修二. 在宅高齢者の主観的健康感と関連する因子. 日本公衆衛生雑誌

- 2002 ; 5 : 409-416.
- 7) 小長谷陽子, 渡邊智之, 小長谷正明. 地域在住高齢者の認知機能と社会参加との関連性－社会活動および社会ネットワークを中心として－. *Dementia Japan* 2013 ; 27 : 81-91.
- 8) 内閣府. 平成25年度 高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果 (全体版). 内閣府ホームページ. <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/zentai/index.html>. (参照 2020-12-1)
- 9) 岡本秀明. 都市部3地域の高齢者に共通する社会活動への参加に関連する要因－東京都区東部, 千葉縣市川市, 大阪市の調査研究から－. *和洋女子大学紀要* 2015 ; 55 : 135-147.
- 10) 福島 忍. 単身高齢者の地域活動・ボランティア活動への参加の促進に関する研究. *目白大学総合科学研究* 2012 ; 8 : 41-50.
- 11) 柳沢志津子, 杉澤秀博. 企業退職男性高齢者における地域社会活動への参加継続プロセスに関する検討－料理サークルを事例とする組織戦略と参加メンバーと相互の視点から－. *老年学雑誌* 2014 ; 5 : 73-90.
- 12) 大澤ゆかり, 松岡広子, 百瀬由美子, 藤野あゆみ, 志水大地, 今井正子, 岡本和士. 地域住民の認知症に対する関心と不安およびイメージの検討. *愛知県立看護大学紀要* 2007 ; 13 : 9-14.
- 13) 矢野香代, 近森由江, 広瀬美映, 山脇優子. 高齢男性の社会参加要因. *川崎医療福祉学会誌* 2008 ; 17 (2) : 437-443.
- 14) Barnes LL, Mendes de Leon CF, Wilson RS, Bienias JL, Evans DA. Social resources and cognitive decline in a population of older African Americans and whites. *Neurology* 2004 ; 63 : 2322-2326.
- 15) Holzman RE, Rebok GW, Saczynski JS, Kouzis AC, Wilcox Doyle K, Eaton WW. Social network characteristics and cognition in middle-aged and older adults. *The Journals of Gerontology Series B Psychological Sciences Social Sciences* 2004 ; 59 (6) : 278-284.
- 16) 武地 一. 認知症カフェによる効果, 武地 一編, 認知症カフェハンドブック, 第2版, クリエイツかもがわ, 京都, 2015, 60.
- 17) 田代和子, 小板橋恵美子, 平澤マキ, 村杉恵子, 岡本あゆみ, 鵜野澄世, 本吉杏奈. 大学と地域住民が連携協働する「認知症カフェ」の開催が利用者にもたらす成果－グループインタビューによる質的分析－. *淑徳大学看護栄養学部紀要* 2019 ; 11 ; 19-29.
- 18) 上條秀元. 高齢者の居場所づくりについての一考察: 「ふれあいサロン」の活動に即して. *宮崎大学生涯学習教育センター研究紀要* 2007 ; 12 : 1-20.

### Investigation of the Factors of Attendance and Continuous to Participate in Dementia Café among Community-Dwelling Seniors

Kazumi FUJIMURA, Ryosuke HASE<sup>1)</sup>,  
Ayano KIJIMA<sup>2)</sup>, Ayako OKOCHI<sup>3)</sup> and  
Tamaki KUMAGAI<sup>4)</sup>

Department of Community System Nursing, Ehime University Graduate School of Medicine, Shitsukawa, Toon, Ehime 791-0295, Japan  
1) Department of Public Health and Preventive Medicine, Yamaguchi University Graduate School of Medicine, 1-1-1 Minami Kogushi, Ube, Yamaguchi 755-8505, Japan  
2) Oita University of Nursing and Health Sciences, 2944-9 Megusuno, Oita, Oita 870-1201, Japan  
3) Graduate School of Health Sciences, Kumamoto University, 4-24-1 Kuhonji, Chuo, Kumamoto, Kumamoto 860-0976, Japan  
4) Graduate School of Nursing, Osaka City University, 1-5-17 Asahi-machi, Abeno, Osaka, Osaka 545-0051, Japan

### SUMMARY

The purpose of this study was to investigate the details of how community-dwelling seniors who have currently been attending dementia café, first decided to visit and continue attending dementia café.

A semi-structured interview using an interview guide was carried out from August to September 2017 for 10 community-dwelling seniors attending a dementia café organized by NPO corporation in city A. The interview focused on what brought these seniors to decide on attending and continue attending the café. All interviews were recorded and transcribed, and a qualitative inductive analysis was conducted.

The results suggested attending dementia café would provide enjoyable experience including extended interaction with others and learning

more in depth, improved consciousness of health and preventive care, and desire to contribute to the local society; hence, seniors would continue attending dementia café. Moreover, given that seniors attending dementia cafés themselves are aware of their contribution to the local society and solidarity with others, it is possible that attending seniors can be key people who support the local area. Furthermore, the social capital in the local community can be fostered through a dementia café as a community café that any residents can attend.



